

古道の災害時活用に関する一考察*

A consideration about the practical use of the old road on the disaster

中根洋治**, 早川清***、可児幸彦****、奥田昌男*****

By Youji NAKANE, Kiyoshi HAYAKAWA, Yukihiro KANI, Masao OKUDA

長期間にわたって使われてきた静岡県浜松市の秋葉山から北方にある我国の典型的な尾根の古道を事例にとる。こうした古道は今でも大部分の区間において昔の形態が残っている。尾根（赤石山脈）の南端にある秋葉神社は、昔から「火防の神」といわれるが、この火の元々は「焼き畑農業」や「冶金」等の火といい、作業の成功と防火にも関係するといわれる。又、この尾根の岩山は、「山岳修験道場」や原始時代の巨石信仰の対象になっていたもので、その頃からこの峰道は人々が往来していたことになる。一般的に山間部の古道は尾根の道が多い。尾根の道は川から離れているので、水はけが良く災害に強いことは踏査した経験からも伺える。思いもよらぬ洪水・地震・土砂崩れなどの災害で、現代の川沿いの車道が壊れて通行止めになった場合、復旧するまでの間孤立した集落への往き来は古道の活用が有効と考えられる。古道の調査方法は参考本・古老の話などを参考にし、現地踏査や計測などによって明らかにされる。

1、研究の目的と背景

秋葉山は「火の神」としてかなり古くから広範囲に知られている。文政年間の記録によると、西は薩州（鹿児島県）から東は奥州（東北地方の東側）まで参詣者があった。現在の秋葉山常夜灯の設置してある所を見ても、東京から新潟県、岐阜県、兵庫県まで広がっている。

各方面から図-1に示すような秋葉道がある。北方からは諏訪湖にはじまり、中央構造線沿いに来る道が、途中で飯田市からの小川路峠越えの道と合流してくる。南方からは、静岡県御前崎東方にある相良港からの「塩の道」と重なりやってくる。東京方面からは、静岡市から山地を経由してくる道もあった。「愛知県方面からは、約10方向から集まっている」¹⁾。その各方向の背後は県外にまで至るので、ほぼ全国から参詣者があったと考えられる。それらの経過地は勿論のこと、各集落にある秋葉山の常夜灯や道標はかなり昔から信仰の通路として利用されていたことが分かる。ところが、このように各地から多くの秋葉道者（どうじゃ）といわれた人達が参詣していた秋葉山であるが、秋葉神社の関係者に神社の

経歴を聞いてもよく分からないことが多かった。また、大正時代頃まで各方面から歩いて参詣したはずの各秋葉街道も忘れられて分らなくなっている。

そこで、筆者らが秋葉古道を踏査しているうちに、古い道ほど尾根を通っていて、雨天の翌日でも水はけが良く歩き易いので、場合によっては災害対策に役立つのではと考えた。古道は河川沿いが少ないために橋が少なく、災害に強いので、災害時に活用されるものと考えた。

2、古道の災害時の活用事例

ここで古道を災害時に活用した具体的な事例を挙げる。

①1972（昭和47）年の小原・藤岡（現在は豊田市に合併）の「七夕豪雨」では時間85mmの雨量で67名の犠牲者が出た。この時、翌日の災害調査を行ったが、今まであった川沿いの県道はズタズタに切れ、途中の橋は取り付け部が削り取られて用を成さない。現場へ近付くと、通行可能な一般道が見つからないので、地元古老の案内で尾根越えの古道を通して隣の集落へ行った。その尾根道は豪雨の翌日にもかかわらず乾いていた。

②新潟県の「中越地震」のことである。長岡市山古志支所の地域振興担当者によれば、「地震直後は全ての車道の通行が不可能であった。各集落の安否の連絡は山の尾根筋を通る古道を歩いてきて教えてくれた」との事であった。

③岡崎市古部町という山間集落の連絡道路である。現在約27戸の集落の人達は、一旦、南にある県道まで3km程のうねった山あい道路を辿って出入りしている。と

* Keyword: 秋葉古道、尾根道、災害時活用

** 正会員 昭和コンクリート工業（株）

（〒450-0002 名古屋市中村区名駅3丁目26-19）

*** フェロー会員 工博 立命館大学理工学部

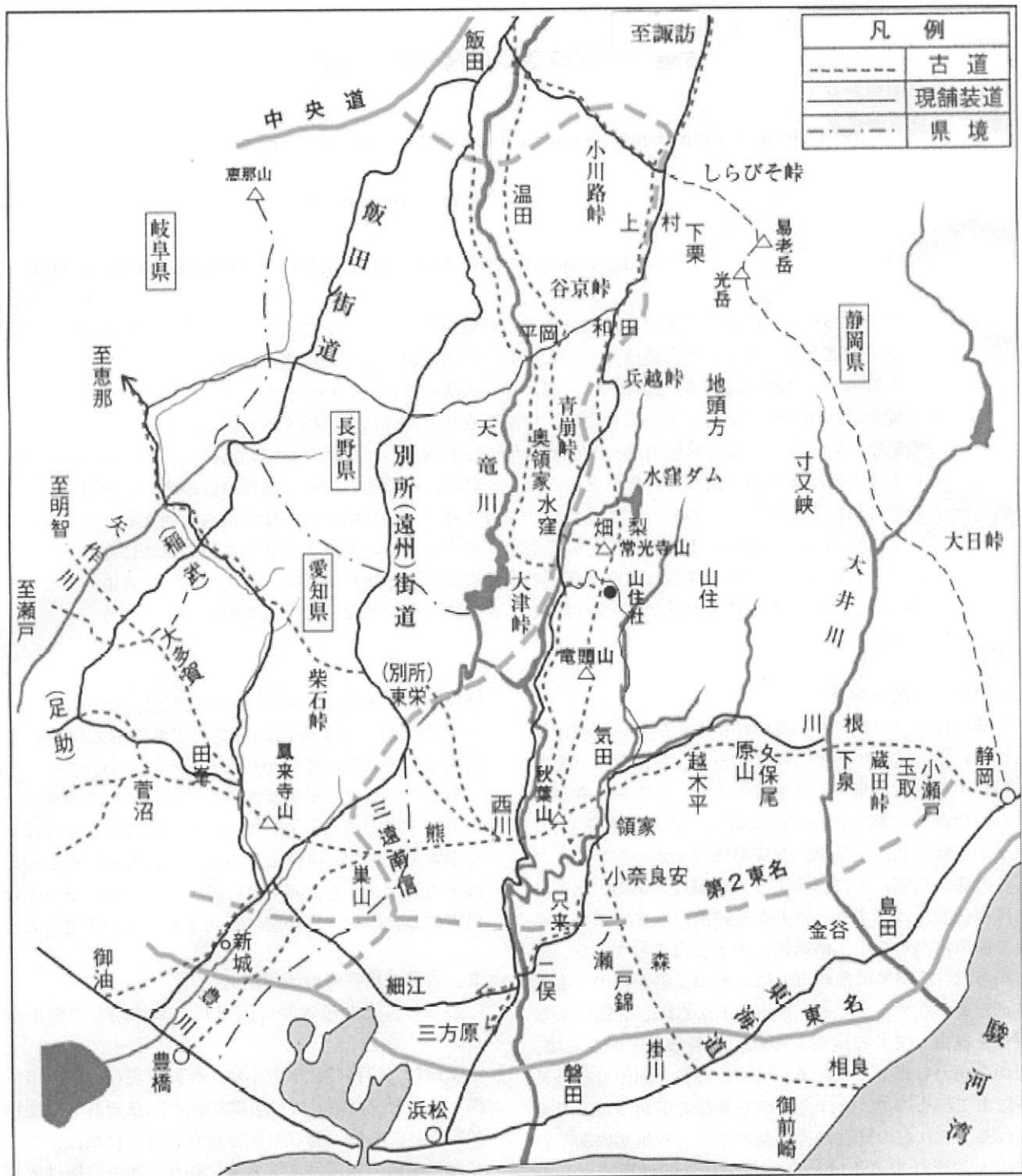
（〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1）

**** フェロー会員 工博 日本コンクリート工業㈱

（〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-11-21）

***** 正会員 奥田建設

（〒468-0004 名古屋市中村区梅が丘3-1412）



図一

各秋葉街道広域図

(作成：中根、2008)

ところが、ある災害時にその巾3mほどの道路が塞がってしまった。車で市街地への出入り道路はこの1本しかなかったため、岡崎市は集落から西方へ抜ける災害対策道路を平成17年度に造った。その道は尾根の古道とほぼ平行していたのである。

このような事例から本研究の目的は、こうした災害時には応急復旧されて車両が通行可能になるまで、孤立した集落への連絡は古道が利用出来ることを提案することである。ヘリコプターではすぐに救助出来ないこと

もあるので、個々の情報収集は全て集めることが困難であると思われる。したがって、古道を承知していることは災害時の連絡路として意義ある事と考えられる。

3、古道と秋葉信仰

(1) 秋葉神社参道の現況

はじめに秋葉山(写真-1)の麓から秋葉神社へ至る現地踏査の結果を説明する。(図-2参照)

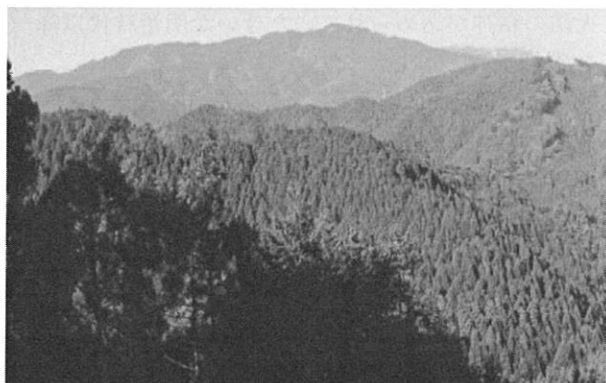


写真-1 南方の光明山から見た秋葉山
(撮影：中根、2007.9.9)



図-2 秋葉峰道拡大図 (作成：中根、2008)

南麓の下社から秋葉寺まで旧来の表参道を歩いて登ると、片道約2時間の道のりである。参道調査の参考に「秋葉山へ1838(天保9)年に常夜灯代10両寄付した」という御嵩町にある古文書の現地調査を行った。

浜松市天竜区春野町領家字坂下の参道登り始めに在る赤い橋は、浜松から九里離れた所に架けられていることから「九里橋」と名付けられた。手前左側は旧「大村屋」という気田川の船宿、その先の「仲屋」は参拝者の宿屋であり、ここには三河の人も泊まった。

麓の標高は約100m。標高160mに在る常夜灯は江戸の三河屋が寛政年間に建てた。気田川(けたがわ)の舟運は気田までであった。上りの場合は人や馬がロープを引っ張って舟を上げた。一方、秋葉山への参拝者は南から来ると、1926(大正15)年に秋葉橋が出来る前は渡し船であった。馬は川の中を歩いた。この参道は「塩の道」でもあった。

つづら折れを登ると、1町(約100m)ごとに単柱の常夜灯があり、その銘は嘉永年間が目立つ。津や吉田(豊橋市)など各地の有志が奉納したという刻字がある。途中には、三河屋・栗田屋・富士見屋・桜屋などの茶屋跡があり、往時の旅人の多かったことを示す。これらの多くは昭和18年3月の大火(火元は秋葉山裏の鉾山)で焼失した。また参道は樹齢60~80年ほどに見える杉やサワラ(樺)の植林の中を通る。ここにある子安地藏は安産を願うところである。無事に安産だった場合、底の抜けた柄杓をお礼に奉納する慣わしがある。小安地藏の近くにも左右一対の段付き常夜灯があり、上部は崩れているが下部を見ると「尾州名古屋・文化年間」の刻字が見える。道中一箇所だけ伐採してあり、南西の向こうに海が見えた。

そこからさらに尾根道を登り、「信玄岩」といわれる岩と石仏を経て秋葉寺(しゅうようじ)の山門に至る。ここは標高700m余、麓から45町目(約4.5km)である。1855(安政2)年の額(一の鳥居に掲げる予定であったものを明治期に掛けたもの)がある。ここにある仁王像は身の丈3mほどの大きなもので、色は少しはげているが極彩色である。右側の仁王像の足下に「愛知県鳳来町巢山」という木札があるので、旧鳳来町から運ばれたものということになる。秋葉寺は1880(明治13)年再興、その後今ある仁王が運ばれ本堂に存置、1951(昭和26)年にこの山門が出来て仁王を内蔵している。

山門付近には、藤枝市の吹屋町(鍛冶職人の町)・鍛冶町などの職人集団が奉納した常夜灯がある。山門をくぐって秋葉寺境内に入ると、その左右には常夜灯の基礎のみ残っているが、その上部が無い。これでは奉納者の確認が出来ない。今まで登ってきた表参道の途中にも、人為的に壊された常夜灯の類が目立った。秋葉山へのお参りは愛知県方面からの人が多かった。

秋葉寺から標高885mの頂上の秋葉神社まで20分の急坂である。現在秋葉神社の歴史を物語るものはほとんど

無く、せいぜい神社周囲に生えている樹齢600年ほどと見られる杉の大木達だけのように見える。江戸時代の本殿への参道両側には常夜灯がビッシリ並んでいたそうだが、古い常夜灯の類は度重なる火災のためか、現在神社付近には一つも無い。神社東方約200mにある随神門付近のみは例外である。

（２）秋葉神社の概要

秋葉山山頂には、718（養老2）年、行基菩薩が聖観音菩薩を奉じた大登山霊雲院があった。後、807（大同2）年、三尺坊（火消しが得意の天狗）が来山して以来、江戸時代まで「秋葉三尺坊大権現」（秋葉山秋葉寺）といわれた（「権現」は神と仏が混在したもの）。鎌倉時代を中心に山岳修験道の道場（奥の院である竜頭山）でもあった。また、「三代実録」に「874（貞観16）年遠江国正六位岐氣保神（ききほのかみ）に従五位下を授く」とある。岐氣保神は火の神で、これは秋葉神社のこと。現代では一般に「迦具土（かぐつち）之大神」といわれている。

しかし、秋葉山については「実際には火防の神としてそんなに古い証拠は無く、近世以降に火防の神になった」²⁾という説に従えば、それ以前の秋葉寺は竜頭山にあったのであろう。

中古以来、神仏混交のため秋葉神社併設の秋葉寺が創立されて主権は僧侶の手にあった。明治時代になると、神仏分離・廃仏毀釈の令により山頂の寺は撤去された。明治5年に住職が入寂し、その時点で当局に無住と判断され、無住の寺は廃寺するという方針に沿わされた。そのため本尊は袋井市の可睡済へ運ばれたものの、山頂には改めて1873（明治6）年に秋葉神社が建てられた。秋葉神社は火防の神でありながら、1901（明治34）年3月・1943（昭和18）年3月・1950（昭和25）年3月の三度も火災に遭っている。

下社（しもしゃ）というのは、1943年の火災により臨時に同年麓へ建てられたもので、現在の山頂にある秋葉神社は1986（昭和61）年に再建されたものである。一方、今まであった寺は再建を許され、本尊が戻された。伝統が続いた秋葉山秋葉寺（写真－2）は、かつての表参道を南東へ歩いて下りて「杉の平」という所に位置する。



写真－2 秋葉山秋葉寺（撮影：中根、2007.12.16）

火防の精神が込められていたせいか明治時代以降一度も焼失していない。

「『秋葉三尺坊大権現』は行基菩薩作の聖観音が本尊であったが、勝軍地蔵や三尺坊像（天狗）もあった。勝軍地蔵は武士の身代わりになる、味方を勝利に導く、とされて武士から熱烈な支持を受けた。そのため、足利尊氏も信仰し、多くの武将から刀剣や武具の寄進があり、あまり多いので里で売られたこともある。ここは、山岳修験の真言密教であったが、永禄年間（1558～1571）に曹洞宗可睡斎の末寺とさせられた。家康は山岳修験道の修験者（山伏）を使い、情報を得た。当山の別当（住職、山伏の統括者）光播は1570（永禄12）年上杉謙信と連絡をとり家康と同盟を結んだ。これに怒った武田信玄は、秋葉山に1571（元亀2）年火を付けた。1603（慶長8）年駿河田中藩の酒井忠利家臣らが登山。1756（宝暦7）年、幕府の天下安全・武運長久・火防鎮護のご祈祷される。その後、1810（文化7）年と1860（安政7）年にも焼失。」³⁾などとある。秋葉寺の火祭りは毎年12月15・16日夜に行者や僧職の手による火渡り他が行われ、秋葉神社の火祭りは同16日に「弓・剣・火」の舞が順次くり広げられる。

現神社西方の歴代住職墓地を見ると、光播の次の光達墓碑名は「通峰光達」になっており、この人も峰々を走り回った人である。

「1685（貞享2）年、信者の団結力を恐れた幕府から秋葉祭の禁止令が出た。同年、袋井市の春日明神神主が隣接の火災が起きた時に盛んに秋葉山を祈念したところ、火災を免れた。それで神供と共に幟を建て祭典を行ったところ、幕府の方針とは逆に一般人の秋葉信仰が急激に盛んになった。この年から全国の参詣が増えた」⁴⁾。「北は千葉県から南は岡山県まで講が106地区で設けられ、参詣の折りは定宿が決められていた。一方、寺領としては秋葉山地の両側13地区で、その中に修験関係法印が最盛期には36院あり、僧職関係者が282人いた」⁵⁾。

このように秋葉信仰は全国各地へ広まり、上杉謙信は地元長岡市（旧栃尾市）へ、家康は小田原市板橋に、犬居にいた天野氏は静岡市（旧清水市）へそれぞれ秋葉山を分神した。また「秋葉山頂上には大居城とは別派（家康側）の天野氏の秋葉城があった。この城は南朝後醍醐天皇の皇子宗良（むねなが）親王のために築かれた。」⁶⁾という記述もある。

上述の「行基」については、「668年生まれ749年没。土木事業を通じて貧困の人々を救うことを己の修行の一環として位置付け、ため池・用水路・道路・港湾の開発を行っている。行基の父は百済の王仁（わに）の子孫といわれる。行基は宇治橋を架けた道昭に師事し、仏教と土木技術を学んだ。732（天平4）年、大阪府の狭山池を造った」⁷⁾という説明がある。また布施屋（街道の無料宿泊所）も9箇所行基によって設けられたことになっている。

以上のような説明が各書にあり、古代の秋葉信仰の歴史は、少なくとも鎌倉期の修験道が盛んであったことまでは遡ることができる。

次節以降では、この山塊をいつ頃からどのような目的で人々が往来していたか、諸説を参考にして説明する。

(3) 秋葉信仰

a) 「焼畑農業の火」

尾根伝いの道が「信州街道」、「塩の道」、「大祝道（おおほうりみち；古代諏訪神社の神人達が巡った信仰の道）」、「東国古道」、「奥の院街道」、「峰道」、「国峰道」（修験道の道）、「秋葉古道」、「秋葉の棒道」などといわれる（以後ここでは主に峰道という）。この道は武田軍も通って三河を攻めたといわれ、遠州と信州を結ぶ「塩の道」でもあった。この峰道の奥に、後述する山住神社があり、一般に縄文時代からの焼畑農業を守る「山犬の神様」といわれる。「焼畑農業は猪やウサギ・鹿などの獣から荒らされるので、焼畑を守る山犬が大切にされた。その焼畑農業の山犬の神と対比されるのが、焼畑で使う火の神であり、この火の神が秋葉神社の元」⁸⁾といわれる。

「『火防（ひぶせ）の神』ともいわれるが、『火防せ』とは焼畑作業の『延焼防止』のことである。延焼防止作業は木の棒を叩いて行われた。焼畑は春焼きと夏焼きがあった。焼畑農家は『お犬様留守番をしておくんなさい』といって神札を焼畑の中へ立てた。この風習は明治期まで行われた。また、塩を好む山犬を恐れた塩商人も山住神社をお参りした。」⁹⁾

山犬について、「東北では狼は恐怖の対象とみただけでなく、神とあがめた地域も多い。狼が人を襲ったことが多かったので、狼の災厄が無いように祈る祭りがあった。また他方では、狼のことを『御犬様』（山犬）と呼んで、農作物を食い荒らす鹿や猪を捕食する有り難い存在でもあった。秩父市の三峯神社が狼信仰の総本山で、火難と盗難よけの神社ともされている。」¹⁰⁾

焼畑農業は、原始時代から昭和30年ころまで続けられたと言われる。また、火を使った畠は畑という字になった。

b) 「冶金の火」

「山頂から北方へ行ったところに黄銅鉱が露出している。この銅の原石を索道で天竜川まで降ろし、船で運んでいた『峰の沢鉱山』（秋葉山北西約2km、1669年幕府採掘、1969年閉山）がある。また『久根鉱山』（秋葉山北方約10km、1731年採掘、1970年閉山）という銅山もあった。上記の記録以前の古代からも銅の採掘が行われたらしい。それは712（和銅5）年諸国の調・庸は銅銭が可能になったこと、また713（和銅6）年には甲斐の国からも銅の産出が記録されていることから推測される。『火の神』秋葉山は、銅精錬の炉に火が入った時を期して祀られた。秋葉の火祭りには、最近まで鍛冶屋さんが多く参拝した。」¹¹⁾などの話もある。現代では工業の

火を扱う職業の人達のお参りが多いという。

“よい銅や鉄が出来るように願うと共に、火事にならないように”と願ったものと思われる。秋葉山の名称を考えると、アキハのアは冶金、キは祭祀場所、ハは銅地名を表すという説もある。

「秋」という字は「虫害をなすズイムシ・ハクイムシを火で焼くこと」¹²⁾とある。「アオキという植物は別名「アキバ」とか「オーキバ」といわれ、木の葉を焙って貼ると火傷の薬になり、またこの葉自体（肉厚）が火伏せの役目をする」¹³⁾という。

「秋葉神社の御神体は『火之迦具土神』だが、これは古事記に登場する『火の神』である。梵語の中に阿耨尼（あぎに）という火の神があり、ここから秋葉の『アキ』がきたのではないか。『ハ』は場所を表す。火を使っていた人達には、農業・鉱業・製鉄・陶器などに携わる作業があるが、ちなみに、我が国で銅の生産が盛んになったのは、『和銅年間』であり、年号も和銅となっている。」¹⁴⁾とのことである。

秋葉山には名刀の数々が奉納されている。『秋葉山本宮秋葉神社の刀剣』には鎌倉期の重文「頼国光」は阿部豊後守・前九年の役で凱旋の伊予守源頼義・九条閑白太政大臣尚実・南北朝時代の「備前長船」奉納者不明・「正宗」は武田信玄・備前長船は1534年山本勘助・伊那備前守・加藤清正・馬場美濃守信房・福島正則など合計400余振りもある。

(4) 「神体山」の関係

ここでは人類最古の「山や巨石の信仰」に触れ、そのころからこの峰道を人々が往来してきたという説明をする。

a) 秋葉神社の神体山は「竜頭山」

「この尾根の道は、修験道以前の土着信仰に関係する」¹⁵⁾とある。土着信仰とは、一般に山・岩・火・天体などの自然崇拝であるが、特にこの稜線では巨石信仰を含む山岳信仰が主になると考えられる。原始的な山岳宗教とは、人が死ぬと秀麗な山（神体山）の磐座（いわくら）といわれる巖かなから魂が昇天すると考えられた原始時代から神社が出来る（仏教伝来後の8世紀前後が多い）までの信仰¹⁶⁾である。

一般に修験道は原始的な山岳宗教（精霊信仰）と密教（真言密教は加持祈祷を重んじる）が結合したものといわれる。山岳宗教は、それ以前の山や磐座の信仰を引き継いでいる。

天台宗は9世紀初めに最澄が広めたが、ここにも千日回峰など修験道の苦行と似たものが現在まで行われている。山岳修験道は一般に8世紀初め、役行者（えんのぎょうじゃ；利修仙人の兄）が始めたと言われるが、秋葉山付近では鎌倉時代に盛んであったといわれる。修験者（山伏）はこのような中、一般人では及ばないような心身鍛錬をして宗教的呪術を行い、里の住民から困り事相談を受け、開発に対して山を呪文により清めた。また、

お札や護摩の灰などを配付して住民の気持ちを鎮めた。同時に、山岳で採れる薬草やお茶・塩なども斡旋し、芸能（後述）の伝播にも一役かっている。さらに山伏は山武士ともされ、尾根を利用した山を駆けめぐることが得意なので、武将が情報収集などに利用したこともある。修験道は明治維新による文化改革により、明治5年に廃止された。

秋葉寺の「奥の院」は竜頭山（写真－3）であった。



写真－3 常光寺山からの竜頭山
(撮影:中根、2007.10.29)

どこの神社でも「奥の院」ということは、元々の神社の場所ということから、ここでも竜頭山が秋葉寺の元（神体山）ということになろう（竜頭山の頂上にはかつて祠があったという）。つまり、竜頭山が当初の聖地であり、後に赤石山脈の南端である秋葉山へ秋葉寺が出来たのであろう。奥の院である竜頭山は標高1352mで、現地を見ると南側に絶壁（東視きや七十五膳供献岩などの修験道場に使われた）がある。（写真－4）

この山は愛知県の鳳来寺山のような岩壁（鏡岩）信仰



写真－4 竜頭山南側の岩壁（撮影:中根、2007.9.8）

の対象であったかも知れない。それを裏付けるように「貞享2年（1685）爆発的に参詣者が増えた時に、数ヶ月の間に鏡が2251面と刀97振りが奉納された」¹⁷⁾という。さらに「古代から秀麗な山を信仰する（原始からの神奈備山信仰）民俗的なことと関係する。それから、秋葉神社の位置する所が、熊野本宮・京都の賀茂神社などと同様、川の合流点にあり、俗界と遮断された禊ぎがなされた後に辿り着く事の出来る聖地である。焼畑農耕と結びついた火の信仰が、越後からもたらされた秋葉信仰（秋葉三尺坊）が接ぎ木され、力強く根付いたのである。」¹⁸⁾と説明されている。

「金光明嶺と呼ばれた秋葉山が不滅の浄火を灯していたので、遠州灘を航行する舟人から夜間でも親しまれ（目印にされ）てきた」¹⁹⁾各地にある「秋葉山常夜灯」（写真－5）は集落の中心に多いが、夜間の往来者に対する目印でもあった。



写真－5 岡崎市細川の秋葉山常夜燈
(撮影:中根、2008.1.4)

ちなみに、近県にある秋葉山常夜燈の最古のものは、岡崎市の甲山寺秋葉堂にあり、1747（延享4）年銘である。「戒光院のあった場所の裏に1715（正徳5）年秋葉寺の奥の院が建立された。」²⁰⁾という記録もある。その後、明治29年に竜頭山南麓に「戒光院」という真言宗の寺が、京都府上醍醐から移転されたが、大正15年東麓の気田へ再移転した。結局、このように日本全国にあった巨石信仰は原始時代から信仰されていたのだが、その後色々な神々が現れ、「火の神」（迦土具大神）とか「山犬の神」（大山祇命）などを上乘せしたのではない（長い年数の変化の中で、縁結び・商売繁盛・交通安全などと御神徳も色々加えている神社仏閣が多い）。

b) 山住神社の神体山は「常光寺山」

山住神社は前述のように「狼」を祀る神社といわれる。

そして、山住神社は709（和銅2）年に瀬戸内海の大山祇神社から分神されたという（山住神社縁起書）。つまり山住神社と書いてもその元は山祇（やまずみ）神社ということであろう（写真－6）。



写真－6 山住神社（撮影：中根、2007. 10. 29）

大山祇命は「山の神」の主でもある。山住神社の歴史を物語るものの中に、境内に2本ある杉の巨木がある。太い方は実測幹周り845 c mあり、現地の説明板では樹齢1300年といわれる²¹⁾。このような巨大杉を擁する山住神社の「奥の院」は、修験道の時代より古くからの信仰を集めた山ということになる。

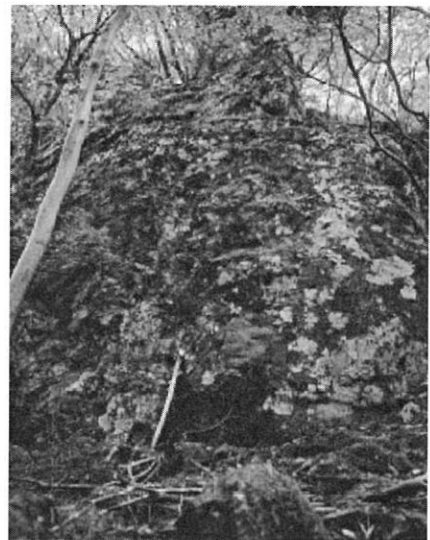
「常光山は山住神社の奥の院である」というので、常光寺山（1438m、写真－7）へ行くと、山住峠（1107m）からすぐに奥の院から移された「常光神」という4 m²ほどの祠がある。



写真－7 南から見る常光寺山
（撮影：中根、2007. 10. 29）

その祠を通り越して「家老平」の駐車場から出発し、原生林の山道を約2時間歩いて二つ目の峰に、高さ8mあまりの「赤岩」（写真－8）と呼ばれる岩壁が東向きに在る。

岩壁全体は赤く、所々黒いのは何かの金属が混じっているものと考えられる。岩壁前面は広く平地になっていて、住民が祭祀の出来る地形である。岩の正面から見ると、充分巨石信仰に値する厳かさがあり、「鏡岩」の



写真－8 赤岩（撮影：中根、2007. 10. 29）

部類になると思われる。常光寺山はこの頂上付近が真っ赤な岩石地帯である。この赤い岩石は、その岩石の色から名付けられた「赤石山脈」の延長上にあることを示す。

現地はこの「赤岩」の上部を越した西隣の峰が常光寺山の頂上であり、そこに貧弱な祠があるが、もっと西へ降りたならかな場所に10 m²ほどの常光神の祠がある。その付近に、「天の岩戸」や「行道岩」があり、さらに西方に蔵王権現・役の行者の石仏があつて、その西は高さ約50mの「天神岩」という絶壁がある。

山頂から麓を見ると、山住神社は真南に位置する（現神社の方向は東向き）。奥の院から南麓に現在の神社があるという配置は他の神社でもよくある事例である。そうすると常光寺山も鳳来寺山と同様、原始時代からの巨石信仰と神体山ということになる。「赤岩」は「鏡岩」と同様な扱いをしていたから「常光寺山」という名前になったのではなかろうか。

「秋葉山の信仰は常光寺山から移ってきて江戸時代に著しく発達している。山の背の道は秋葉参詣以前の修験者の道である」²²⁾という柳田国男説がある。

やはり、山の名前が示すように「光」（火）と関係あるということで、これは「赤岩」が「鏡岩」の扱いを受けていたことになる。それではなぜ常光寺山の南麓にある山住神社が「火の神」になっていないのか。このことについては、前掲文献22)の柳田説がある。

修験道の行場（回峰路）は西麓の「河内浦」に代々住んでいた山住宮司宅から身を清めてから出発しなければいけないとされた。山住宮司宅は荘園の成立以前からの旧家で、5000ヘクタールの山林と二つの集落を持っていたといわれたが、今は無人である。神社由緒書きによれば、「徳川家康が山住神社に刀剣を奉納している（1576年2振り、1614年1振り）。また、1733（享保18）年落雷により火災、1879（明治12）年建て替え」などがある。

c) 光明山の「鏡岩」

秋葉山から気田川を隔てた南の光明山（標高540m）も信仰の山であった。記録に残る江戸期の旅は、光明山と秋葉山は対であり、光明山の方を先に参拝した。なぜ光明山がそんなに有名であったのであろうか。巨石信仰の事例としても関係ある。江戸期から秋葉山は「火の神」であり、光明山は「水防の神」とされている。この山に「鏡岩」があるから「光明山」であり、その別名が「鏡山」になっているのであろう。この山を「水防」に結びつけたのは火防の秋葉山に対して後からこじつけたように思われる。

「鏡岩」とはどんなものか、鏡は原始人から恐れられ、弥生期には神聖視された。また『全国石仏石神大辞典』によれば、「人の善悪も写し出し、悪事をはたらいた人は黒く写るとされた。また今まで犯した罪や穢れを鏡に写して、鏡岩の上から投げ捨てる滅罪の効果を願った（これは現代、各観光地の崖の上で行われる“かわらけ投げ”に名残がある）。だから、鳳来寺山では江戸期まで鏡の奉納が多かった。」²³⁾などとしている。また、古代から鏡は測量に使われた、という説もあるが、現代でも測距儀や航空写真測量に使われている。

光明山の開祖は僧行基と伝わるが、「747（天平19）年聖武天皇の命により、七重の宝塔が造営され、金光明経がそこへ安置されたといわれる。ここも七十五膳献供の行事が行われてきた。光明寺へは南北朝時代の後醍醐天皇の皇子である宗良親王が1337（延元2）年参拝した。当寺は戦国時代に焼失したので、1623（元和9）年には将軍秀忠が、1634（寛永11）年には家光が再建した1931（昭和6）年庫裡の煙突からの出火によりまた焼失したので、天竜市山東へ移された」²⁴⁾という。

鏡岩は、寺跡から北方へ30分ほど遊歩道を歩いて、「籠堂（こもりどう）」のあった場所の近くにある。高さ約6m、長さ約40mの岩壁（写真－9）である。そのほ



写真－9 光明山の鏡岩（撮影：中根、2007.9.8）

ぼ垂直の鏡岩は東方を向いており、岩質は秋葉山と同様な鉱物を含む茶褐色の岩である。鏡岩の先には岩壁に囲まれた「奥の院」跡があった。その後南方に広い土地を求めその名も「大鏡山光明寺」が出来たという事になる。

東方を向いた鏡岩は、太陽を意識した重要な鏡岩であったと思われる。鏡岩（岩壁）信仰は、滋賀県の「日吉神社」や三重県熊野市の「花の窟」が有名だが、愛知県には「鳳来寺山」を初め多くの鏡岩（岩壁）信仰がある。「鏡岩」も「磐座」や「金勢信仰」などと同様に原始巨石信仰である。

以上をまとめると、原始時代からの巨石信仰と太陽信仰は、焼畑農業や冶金と結びつき「火の神」を赤石山脈南端の秋葉山へ設定したようである。したがって、当時からこの峰道は人々の往来があったことになる。

4、古道の往来と歴史的災害例

（1）旅行者のこと

各記録にある主な秋葉山への旅行者は、尾張藩士の後俳人となった横井也有、勤王家の高山彦九郎が1774（安永3）年に登っている。司馬江漢が1788（天明8）年6月27日から登拝した。江漢は蘭学者であるが、安藤広重の東海道53次の原画を描いた画家でもある。このときの紀行を『江漢西遊日記』として著した。

- ・1815（文化12）年秋、十辺舎一九が登り、『秋葉山・鳳来寺一九の紀行』を出版。
- ・チエンバレン（英国の言語学者）は1873（明治6）年来日して、秋葉山に登拝した。
- ・アーネストサトウ（英国外交官）は1881（明治14）年8月1日登拝。
- ・深田久弥（山岳紀行を記述）は1965（昭和40）年1月1日登拝後久保田古道を降りて京丸山へ向かう。

その他多くの人々が訪れたとされる。

（2）地名のこと

地名はかなり昔の事柄を物語っていることが多いので、犬居（いぬい）と気田（けた）について説明する。

秋葉山の南麓にあたる「犬居」という地名は気田川の水に浸される土地という。犬居は気田川の屈曲部にあたる低湿地ということである。洪水の時に田園部へ泥が溜まることを方言で堰泥（いぬま）が居るという。犬居島は山奥に数少ない田園部のことをいう。乾（いぬい）とも書いた。」²⁵⁾犬居から秋葉山が乾（北西）の方角になるが、犬居という地名は方角をいうのではないであろう。

この辺りには「門桁（かどけた）・気田・気田川などケタという言葉の付く地名が多いが何であろうか。それは「鮭」のことであり、ロシア語や鮭の学名がこの川を沢山上った魚の鮭のこととなっており、全国7箇所ほどの地名の場所も鮭と関係ある所」²⁶⁾という。

（3）住む人々のこと、他

「①表参道の犬居に『綱ん引き』という祭りがあるが、これは竜の姿を竹・柳・葦などで作り、集落付近をうね

って水難防止を願う。犬居こそ水害を恐れた地区であろう。②昔から12月15～16日の秋葉山の祭りには、地元の人達は注連縄と大根を納めた。」²⁷⁾などの話が地元にはあったそうである。

この「峰道」のある赤石山脈南端は、一つかみに25kmといわれる。この山脈の西側には約1000m下方に天竜川が流れている。この付近の天竜川右岸中腹の民家は、明治期の植林の関係者ではないか、また反対側の左岸中腹の民家は、銅産地の関係者ではないかという説がある。

他にも山の高いところに点々と集落があったが、そこに住んでいた人達は谷底まで降りることは少なく、尾根を越えて行き来していたそうである。そして、例えば日本のチロルと呼ばれる飯田市下栗の人達は、大井川沿線の井川や田代から光岳（てかりだけ）を経て飯田へ通ずる道筋を辿ってきたといわれる。

古来から、このように人々の往来が山道で頻繁にあった。

(4) 歴史的災害例

通行に影響を与えるような災害の種類には、風水害・地震・土砂崩れなどがある。国内では毎年のように各地で集中豪雨による災害がある。しかし、ある地区に限定すると大災害をもたらすような確率は極めて少ない。次に、この地区の歴史的災害記録を文献から抜粋する。

「715（霊亀元）年、震災、山崩れが天竜川を数10日塞ぐ。1715（正徳5）年、180年来の大水害。“未（ひつじ）の満水”という。

1854（安政元）年、震災、郡下1400戸余全壊、山上の家屋が山崩れのため転落。1904（明治37）年、豪雨により橋の流失、犬居学校生徒50人帰宅不能」²⁸⁾などと沢山ある。これらの大災害を受けても、古来からの峰道は安定していたようだ。

5、古道の歴史的役割

(1) 神体山に通じる道

前述のように、人々が住み始めた狩猟生活や焼畑農業の縄文時代から神体山（巨石信仰）への往来があったようである。

(2) 黒曜石の道

石器時代から信州和田産の黒曜石が各地へ運ばれたが、それは国道153号長野県の治部坂峠の遺跡からも発掘されており、尾根の道が使われていたようである。当地区坂下付近の原にある「御堂平遺跡」や気田小学校南の「麻舟山遺跡」などから縄文時代の黒曜石が見つかったが、これらも秋葉の峰道を運ばれたことが予想される。

御前崎市役所文化財担当者によれば、「静岡県の御前崎台地の縄文時代前期の『星の糞遺跡』からその名の如く黒曜石が沢山出土したが、その産地は諏訪湖北方の和田峠のものが一部ある（残りは伊豆半島の神津島産）」とのこと。浜松市の文化財担当者によれば、「中区蜷塚

町四丁目の『蜷塚遺跡』・西区雄踏町の『長者平遺跡』・北区都田町の『川山遺跡』などの縄文遺跡は和田峠産の黒曜石が多い。」とのことである。

縄文人は主に山腹や山麓で生活していて、焼畑農業や狩猟生活をしていたことが多かったといわれる。秋葉神社所在の山頂から石斧が出土している²⁹⁾ことから、縄文期の人々は竜頭山や常光寺山などの神体山へ時々訪れ、峰道を往来していたようである。また、秋葉山の在る浜松市天竜区春野町域の縄文遺跡群は「里原遺跡」を中継基地にした道筋を形成しており、『春野町史』では図-3に示す縄文遺跡のネットワークを「縄文街道」と仮称している³⁰⁾。

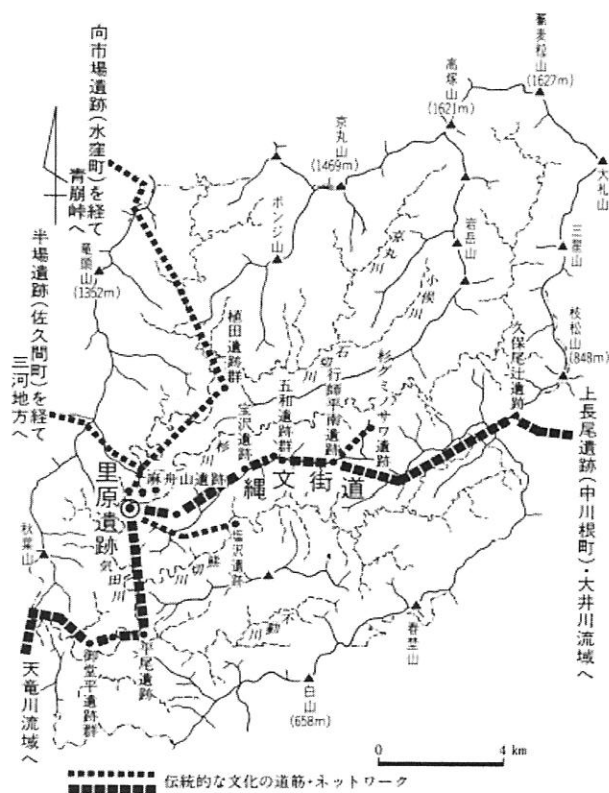


図-3 縄文街道（『春野町史通史』上巻より）

この縄文街道筋は、図-1に示す秋葉街道筋とも部分的に重なっていることから、秋葉街道筋の古さがわかる。

峰道北部の山住神社から真っ直ぐ北進して、地頭方にある水窪ダム（80数戸水没）から兵越・青崩峠へ向かう古道もあった。また、常光寺山を通る尾根の道も利用されたいが、地形が急峻のため馬の通行は無理であったろう。

(3) 信仰の道（秋葉古道）

一般に秋葉山への道は「秋葉街道」といわれ、この「信仰の道」はまた前述したように、もっと古くからの道を受け継いだ「秋葉古道」とも考えられる。「秋葉山への表参道は、東海道の掛川市～森町～犬居から山頂へ登るルートであった。この中、森町三倉～犬居までを例にと

ると、尾根の道から谷底の道へ5回ルートが変わっている。こういう状況を道の『下降運動』という。」³¹⁾。こういう「下降運動」という状況は一般的に多くの街道に見受けられるが、これは江戸時代以降、世の中が平和になって戦いも減り、荷車や牛馬車・自転車などの車両が出現したために、徐々に勾配の緩やかな谷底のコースが選ばれたことによる。³²⁾

飯田市では、中央道に沿った一番高い県道が、「上道（うわみち）」あるいは「伊那街道」といって最も古く、現在の幹線は最も低い三段目になる。そしてその道を含め、市内各地に秋葉山を示す道標や石碑が沢山ある。例えば、飯田市の「鳩ヶ嶺八幡宮」（やわたさま）の前の道標には「右しもじょう・左あきは、宝暦十年」と案内されている。

図-1に示すように、飯田市方面からは「小川路峠」（1490m）を越えて行くルートが有名だが、その他に天竜川左岸を下って温田（ぬくた）～谷京峠～水窪の道、さらに天竜川右岸を下って平岡～大津峠～水窪を経ていく道などもあった。

このように、一般的に江戸時代以前の古道は高い尾根道を選ぶ例がほとんどであった。山頂の秋葉神社は麓から50町目（約5km）にある。北へ尾根を約15km行った竜頭山を経て、山住神社から水窪へ繋がる峰道は、信州への古道で「塩の道」としても使われた。現状ではこの峰道の沿線に住居は見当たらず、遠方に東西両側の山なみが見える。

江戸期以降は、秋葉神社から2km余北へ行った「前不動」から天竜川溪谷中腹まで降りていく道が主な「塩の道」であった。太平洋沿岸から信州へ行くルートは天竜川沿いに進めばよいと一般的に思われるかもしれないが、天竜川沿いの道筋は大変蛇行していて急峻のため、歩くことが出来なかったとの事である。

この「峰道」は、1984（昭和59）年に出来た天竜林道（スーパー林道）にほぼ沿っている。この天竜林道は現在、山住峠を越えて水窪ダムの方面まで続き、観光道路化している。

「峰道」を南から辿ってみる。気田川右岸の坂下から秋葉山頂の秋葉神社までは既に述べた。その先、第2・第3駐車場（43町目石）から久保田古道（秋葉山から東側の久保田へ下りる古道）を経て、その分岐点→「前不動」→36・39町目石→スーパー林道を横切り西側の山へ→久保田からの現在の舗装道と交差→その先は真っ直ぐ山へ入ると「さいの川原」（写真-10）に至る。

昔この付近の行き倒れ人（7人）を葬った所。礫を積み上げた塚が尾根の皿状地形にあり、樺の大木3本もある。また、3体の石仏が北側の山腹から見えている。「さいの川原」なる石碑は1787（天明7）年新城の人が建てた、という銘がある。この碑は盆地の南端にあり、盛土状態の峰道脇に立っている。

「さいの河原」→「一杯水」（峰道の数少ない水場。石



写真-10 「さいの河原」碑の右が峰道
（撮影：中根、2007.10.15）

碑は天明7年に新城の人が建てた。）→近道して山を越える→ほぼ現道沿いに進む→「八尺坊」の分岐点に至る。八尺坊とは家康の長男信康の別名であり、ここで生きのびて山伏になったという伝説がある。

「八尺坊」→尾根→戒光院跡を通る→ほぼスーパー林道沿い→山住神社駐車場手前→山腹を降りる（標高差約600mは1時間ほどでツヅラ折れを下りる。この道では武田軍の騎馬隊が通過するには急過ぎて困難と思われ、せいぜい歩兵である徒組の通路であろう。）→家康腰掛け石（写真-11）に至る。



写真-11 家康腰掛け石付近の尾根道
（撮影：中根、2007.12.8）

家康腰掛け石→山住字河内浦→切り通し溪谷は北側の山腹を通った。切り通し溪谷は昔の別名で「屏風谷」という。古道は山住字河内浦から字臼ヶ森の高いところを通っていたが、明治・大正期の道は崖の中腹にある高さ・巾とも1.8mほどのトンネル（写真-12）を通り、いずれもカマノ沢で現道へ合流。昭和期に入って現在のような川沿いになり、1954（昭和29）年に拡幅し現トンネルが出来て、河内浦まで車道が開通した。河内浦～山



写真-12 崖中腹の旧道、正面左奥にトンネル、
右下は現県道（撮影：中根，2007. 12. 9）

住峠～門桁までの県道は1965（昭和40）年開通した。そして、切り通し溪谷→水窪の町→信州へ至る。

『春野町史』によれば、1772（明和9）年ころ、戸倉～西川の天竜川渡し（鳳来寺方面）は年間25000人で銭16貫文、他の堀之内～領家と東雲名～西雲名（南方の浜松・掛川方面）は銭1貫文の収入であった（4貫文は金1両）³³⁾。ということは、秋葉山への参詣者は愛知県方面が断然多かったことになる。一方、「天竜川を利用した通船が1636（寛永13）年に伊那から下流に始まり、これを利用した秋葉詣でもあった」³⁴⁾ そうだ。

（4）塩の道

前述の信仰の道はまた古くより「塩」を代表とする生活物資の運ばれた道でもある。また翡翠（ひすい）の産地である北陸の姫川流域からも、この中央構造線に沿って来る「塩の道」が使われたことであろう。生活物資はこれらの他にも各種あったが、山の幸や海の幸の種類は時代によっても大幅に異なる。例えば、男の丁髷（ちょんまげ）や女の日本髪を結う「元結い」は江戸時代まで飯田の名産であった。その他、挽物（木地師の製品）や漆器・こけら（柿茸き用板）・鉱石などが山の幸である。平地からは灰・瓶・酒・砂糖・茶など各種あった。

「『秋葉街道』とも呼ばれるこの道は、秋葉山のために拓かれたのではなく、相良・御前崎の海まで続くのだから秋葉より古い信州街道と呼ばれる道である。」³⁵⁾ という記述もある。

また、「奥地への必需物資の輸送路が、時には略奪の危険を伴う中腹の交易路を避けて、秩序ある修験道が管理する尾根の道が使われた。いわゆる塩の道である。坂道を人の背で担われた物資は、秋葉山上の市で取引され、ここから尾根道を馬の背で峰峯の要所を中継所としながら、はるかな国境の彼方へと運ばれた。」³⁶⁾ ともい

われるが、峰道でも略奪の記録がある。

更に、本研究の北端である水窪に関しても、「信州と遠州の中継基地とされ1564（永禄7）年には月に6度の市を開いた」³⁷⁾ といわれる。

（5）戦いの道

戦乱は古代の「倭国大乱」から続いているが、いつの時代の戦争もどの道を通ったか分からないことが多い。

南北朝時代、この付近は南朝方であった。秋葉城は後醍醐天皇の皇子宗良親王のために築かれたが、その後この城へ天野氏が入った。秋葉山の表参道から尾根を兵越峠や青崩峠の方へ行く道は、「秋葉の棒道」といわれる。1568（永禄11）年、武田信玄のもと、秋山信友が2千人を率いて峰道から犬居城に入っている。その後、信玄はこの道を二度通った。一度は1571（元亀2）年3月の高天神城を攻めた後、犬居城を経て高遠への帰途、二度目は1572（元亀3）年10月10日、徳川家康との三方原戦へ向けてである。この道で数十kmに及ぶ長蛇の隊列には無理があるので、幾つかのコースに分けて進軍したのであろう。

以上、古道を目的上「神体山・黒曜石・信仰・塩・戦い」の道に分けたが、各々専属の道があったわけではなく、同じ道でも往来者の目的は色々であり、「情報」も古道を往来した。古道の役割には「文化交流の道」もあった。花祭り・田楽・三河万歳・浪花節などの山伏に関わる芸能の道、冠婚葬祭・郵便・前記以外の参詣など、その用途は千差万別であったが、古道の多くは今でも安定した姿で残っている。

6、結論

古道には、上に述べた各種の往来目的がある。なぜ古道ほど尾根の道を通ったか、その理由は、

- ①見通しが良い。
- ②敵や獣に対して有利。
- ③乾いていて歩きやすい（川の横断が少ない）。
- ④地図上の最短コースの尾根を選ぶ。

などによる。具体的に「見通し」とは敵の様子や、出水状況などのこと。「獣」とは熊・猪・猿・狼さらにここでは、マムシ・蜂・蛭（ひる）・毒虫などをいう。狼は江戸時代まで日本各地にいた。それから古道は地形にもよるが、目的地まで登り下りをいとわず地図上の最短距離のルートを選んでいく。

図-3に示した東西の縄文街道は、縄文早期の遺跡を結ぶルートを示し、結果的にこれも尾根の道である。岡崎城→足助地区→信州（飯田市）を結ぶ尾根の道が2本あることや、中世まで遡ることの出来る豊橋市→設楽町→信州へ至る伊那街道も、高い山腹や尾根を利用していることなど、尾根道の事例である。

結論として、ここで扱った「峰道」のような古道は、その両側にある谷の中腹から麓にある多くの集落が、予想外の洪水や地震などの災害で川沿いの道が通行止め

になった場合、復旧までの間孤立した集落の往き来に活用出来ることが考えられる。また「峠道」の途中へ至る道は、やはり何本かある山脈横断古道が壊れにくく安定しているので、災害時には活用できる。

本論文は、「秋葉街道」を踏査して得られた、災害時に活用できる古道の事例をあげ、他の地域でも同様に古道を念頭において日頃から慣れ親しんでおく必要を主張するものである。

参考文献

- 1) 中根洋治：『忘れられた街道』（下巻）風媒社、巻末位置図、2006.
- 2) 春野町史編纂委員会：『春野町史』上、春野町、p. 612、1997.
- 3) 田村貞雄監修：民衆宗教史叢書第31巻『秋葉信仰』、雄山閣、pp. 38、51、1998.
- 4) 前掲3) p. 4
- 5) 前掲2) pp. 612、616～618、628
- 6) 天野信景：『塩尻』（1712《正徳2》年著）、明治40年国学院大学、p. 777、1965年復刊
- 7) 高橋裕：『現代日本土木史』第2版、彰国社、p. 32、2007.
- 8) 前掲3) p. 6
- 9) 野本寛一：『焼畑民俗文化論』雄山閣出版、pp. 434、435、531、1984.
- 10) 工藤利栄：日本経済新聞（2007年7月9日朝刊、文化欄）
- 11) 木下恒雄：『秋葉山郷土誌稿』自費出版、p. 44、1985.
- 12) 白川静：『字統』、平凡社、p. 422、2004.
- 13) 前掲3) p. 21
- 14) 木下恒雄：『春野町の地名』自費出版、p. 98、1987.
- 15) 前掲3) p. 19
- 16) 中根洋治：『愛知発巨石信仰』自費出版、p. 1、2002.
- 17) 前掲2) p. 615
- 18) 前記3) p. 18
- 19) 鈴木昭英：山岳宗教史研究叢書9『富士・御嶽と中部霊山』、名著出版、pp. 202～204、1978.
- 20) 藍谷俊雄：『三尺坊』秋葉山秋葉寺発行、p. 85、1996.
- 21) 中根洋治：『愛知の巨木』風媒社、p. 7、2005.
- 22) 柳田国男：『定本 柳田国男集第2巻』『東国古道記』、筑摩書房、p. 246、1962.
- 23) 前掲16) p. 170、2002年
- 24) 神谷昌志：『天竜川と秋葉街道』明文出版社、pp. 184～188、1987.
- 22) 前掲14) p. 105、
- 26) 前掲14) p. 128
- 27) 木下恒雄：『綱ん引き』自費出版、pp. 15、230、265、300、1992.
- 28) 木下恒雄：『静岡県周智郡犬居、気田、熊切、編年・春野の歴史』自費出版、pp. 11、128、166、212、1984.
- 29) 木下恒雄：『編年・春野の歴史』自費出版、p. 2、1977.
- 30) 春野町史編さん委員会：『春野町史通史（上）』春野町、pp. 100～101、1997.
- 31) 木下恒雄：『歩かまい・秋葉街道』自費出版、p. 350、1992.
- 32) 中根洋治：『愛知の歴史街道』自費出版、p. 328、1997.
- 33) 前掲2) p. 639
- 34) 沖和雄：『伊那』、伊那史学会第22巻「秋葉街道覚え書き」、1974.
- 35) 前掲20) p. 246
- 36) 前掲18) p. 204
- 37) 水窪町史編さん委員会：『水窪町史』水窪町、p. 117、1983.